



カールフェルト伯の歓待は王侯のそれと遜色がないほど贅を凝らしたものであった。パリですらお目にかかれぬ花火にヨーロッパ中から招いた大歌劇団。各々仮面をつけた紳士淑女が舞踏会で社交に勤しむ。オーストリアの将軍フォン・シュピールスドルフはサロンの一室で脚の疲れを癒していた。彼の姪のベルタは、まだ踊り足りないとはばかりに義父の腕をとる。歳には勝てぬと将軍は、姪の行動に自由を与えた。ベルタは喜色を浮かべて部屋を出る。将軍はゆつくりとした足取りでドアの近くの椅子に座ると、早速相手を見つけた姪を微笑ましく見守っていた。

「お久しぶりです、お変わりありませんか？」

将軍の耳元で艶のある声が囁いた。振り向くと、そこには着飾った威風ある貴婦人が座っていた。仮面越しにも伝わってくる高貴さと美しさに、将軍は思わず息をのむ。

「イタリアの件以来ですわ。あのときは将軍のご尽力にも関わらず残念な結果になってしまつて……」

貴婦人は声を落とす。久しく彼の念頭になかったことではあるが、彼女に言われてすぐ思い出せたあたり、確かに面識はあるのだろう。将軍は、ヴィーンやトリーストにいたころのことを言っているのだと考えた。しばらく取り留めのない世間話をしながら、将軍は眼前の人物といつ会ったのか思案する。

ふと、貴婦人がベルタの方を向いて「ミラーカ」と呼びかけた。将軍が見遣ると、ベルタは同年代の令嬢と楽しげに話をしていった。令嬢は母親に呼ばれたときの返答をすると、将軍の姪の手を引いてサロンの一室へ戻ってくる。ベルタとミラーカと呼ばれた令嬢の笑顔に、貴婦人は苦笑の声を漏らす。令嬢は優雅な手つきで将軍に挨拶をすると、ゆつくり仮面を外し

て手に取った。

その顔は美形であると同時に妖しいまでの魅力に満ちていて、流し目を受けてしまえば仮令同性であつても悩殺されかねないだろう、と將軍は感じた。



オーストリア帝国シュタイアーマルク。首府グラーツからも遠く離れた文明以前の森に聳える淋しい城館が私の家だつた。自然豊かで美しく、あらゆるものが廉価なこの領地を、オーストリア軍を退役した英国人の父が買ったのだつた。淋しい、そう、淋しい。母は私が物心つく前にすでに亡く、使用人とその家族を除けば、この城に住む一家とは父と私だけだつた。

城館も左右三十マイル弱の森の中の孤城で、父の元同僚シュピールスドルフ將軍の城館まで二十マイル、一番近い人里までも七マイルの距離があつた。確かにほんの三マイルの場所に村もあつたが、ここは昔廢絶した名門カルンシュタイン家の領地ではない。ガヴァネスのマダム・ペロドンにマドモアゼル・ド・ラフォンテーヌ、そして時折五リーグも六リーグも向こうから尋ねて来てくれる同年代のお嬢様方のおかげで、全くの孤独ではなかつたけども、これが普段の私の社交のすべてだつた。

そんな私にとつての最初の事件。あれは、まだ六歳にもなつていなかった頃だと思ふ。部屋で妙齡の少女が笑つていた。私はなぜか泣いていた。ベッドの傍らで彼女が手招きする。彼女のあたたかい胸に抱かれて、私はようやく泣き止んだ。髪に触れる彼女の手。優しい愛撫がくすぐつたく、つい笑みが口端から零れる。愛おしいものを見る目。吸い込まれそうな瞳。

彼女の頬に手を重ねる。彼女も私に手を重ねる。そして――

少女が泣いていた。私は彼女を胸に抱いていつものように背中をさする。どうしたの、どうして泣いてるの。肩に軽い衝撃を受け、私はよろめいた。

彼女は首を横に振る。彼女が苦しうに何か言っている。腕に力をこめて、彼女を抱きしめる。私が何か言っている。ああ、彼女はそして――

胸に強い衝撃。二本の針で首筋を刺し貫かれたような、痛みを感じる間もない衝撃。

そこで、私は目が覚めた。大声で泣き叫ぶ。ハウスキーパーと私のナースメイドが駆けつける。首から胸を肌蹴て、傷の様子を探る。しかしそこは滑らかで、弄る手が朱に染まる様子は全くなかつた。私が訳を話すと乳母は青ざめ、ベッドの下にクローゼット、窓外に侵入者の搜索を行い、朝も父や使用人らが城の周辺を調べ上げたが、結局誰も見つからなかつた。他のことは何も憶えていなくても、これだけは憶えている、物心がつかつかないかの幼かつた私の思い出。恐怖と安らぎが同居した、不思議な夢だつた。

「シュピールスドルフ將軍は、明日来られないそうだ」

美しい夏の夕べ、城館の前の林道を散歩しながら、父はそう告げた。困つたように白髪交じりの頭をかき、父は二枚の手紙を私に寄越す。

「ラインフェルト嬢が亡くなつた」

私は父の顔を見た。鳩尾の下を急に締め付けられたような感覚に襲われ、膝から力が抜けていく。どうして、ひと月前の手紙では具合が悪いとは言つていたけれども、命にかかわるなんて一言もなかつたはず。私の表情に、父は黙つて手紙を指差した。それでも、私はほとんど要領を得なかつた。

あまりに異常でいたるところが矛盾しているのである。もう一度、今度は父に音読してもらっても、私にわかったのは將軍が悲しみのあまり取り乱していることくらいであった。

『私の余生はあの怪物の追跡と抹殺だけに費やされるだろう』か……ローラ、どうだい？』

私は首を横に振る。奇妙な手紙はここで途切れていた。私の前にある事実は、ただただベルタ・ラインフェルトがその命を失ったことだけなのだ。

気が付けば、日が沈んでいた。私は父に手紙を返すと、目の周りを拭って歩くしかなかった。一マイル近く歩いてようやく城の正面にたどり着いたところには、すっかり月が薄雲の中に見える位置で輝いていた。

ちようどその時、地を揺らす馬車の車輪と馬の蹄の音が橋の向こうの高台の影から聞こえてきた。そうしているうちに二騎の護衛に続いて四頭立ての馬車が大十字架と菩提樹の丘に向かうところが目に入る。

「いかん！」

私と、それを見ていた父が叫ぶ。馬車の馬が何かに怖気づいたようで、そのまま他の三頭を巻き込み、護衛をすり抜け狂おしい襲歩^{セロックス}でこちらに疾駆してきたのだ。絹を裂くような悲鳴が聞こえる。

「ローラ下がれ！」

少しの間をおいて、父が私を城門の方へ押し込む。あとは、一瞬だった。

暴走した馬車はその片輪を木の根に乗り上げ、轟音と共に横転。コーチマンは投げ出され、馬は二頭そのまま倒れこんでいた。父は駆けつけてきたマダム・ペロドンに何か託け^{トケ}をすると、横転した馬車へと走る。ただ茫然と眺める私の横を、城のコーチマンにグルーム、果てはバトラ¹⁰とブットマン¹¹たちまでが父の下へと駆けていった。そして父の指図でまだ暴れてい

る残り二頭の馬を宥^{なだ}め、ひっくり返った馬車の扉をこじ開ける手伝いを始めている。

馬車の扉がようやく開く。中から、青ざめた顔ではあるが、とても気品溢れる女性がよろめきながら立ち現れた。と、父に何か悲痛な表情で訴えている。私は意を決して、城門の陰からその修羅場へと向かった。

私が現場についたちようどその時、妙齢の女の子が馬車から担ぎ出されている。医師の心得がある父はすぐさま少女の腕をとり脈を測る。そして、小さく息をついた。

「奥様、大丈夫です。脈はあります」

貴婦人は、父の言葉に両手を組んで天を向く。月光に照らされた目じりには、うつすらと光るものが見えた。が、すぐにまた儂げな表情に戻り、間に物を挟んだ言葉遣いに戻った。

「近くに、この子を預けることができる場所はありますか？」

貴婦人は父に問うた。何でも、「生きるか死ぬかの旅の途上で、一時間でも遅れたらすべてを失ってしまうかもしれない」らしい。後ろでは使用人たちと彼女の部下たちが馬車を立て直し、馬を繋いでいる。

私は父の耳元で、倒れている令嬢を城で預けられないか提案してみた。父は首肯し、早速貴婦人に申し入れる。

「ご主人、それはあまりにも……このままではその親切心と騎士道精神に頼り切ることにあります」

父の案に貴婦人はおろおろしながら答える。

「ご安心ください。むしろ、我々がその親切を施されることになります。

実は、うちの娘はとても長い間楽しみにしていた客人の来訪を、不幸にも

失ってしまったもので。もしご令嬢をお預けいただければ、娘にとつても慰めとなりましょう」

父はそれから、ここから一番近い村でもかなり離れていること。そこには宿屋もないことを告げ、大切に世話すると請合^{うけあ}った。

そして貴婦人はマダム・ペロドンが介抱していた少女の頬にそそくさ口付けすると、彼女の従僕に伴われて馬車に乗り込んだ。馬車はたちまち先ほどの襲歩と変わらない勢いで駆け出し、残された私たちにはただ旋風が過ぎ去っただけのようにも感じられた。それがただの感想に過ぎないことは、マダム・ペロドンの膝に頭を預ける少女の存在から察する他なかった。

私は夜中の一時まで待ちぼうけを食らった。マドモアゼル・ド・ラフォンテーヌがお医者様の診断まで待ったをかけたからだ。結局私はこの時間まで、使用人が呼びに行った二リーグ先の医師がやってくるのを、ひたすら待つしかなかったのだ。

と、石の床を皮で叩く音が二つ、近づいてくる。私は居間から回廊に飛び出し、父とお医者様を出迎える。私の顔にお医者様は少し微笑み、患者の好ましい診断を伝えてくれた。早速私は父に面会の許諾^{きょだく}を伺う。父とお医者様の少しのやり取りの後、父が頷いたのを見るや否や、私の脚は城で最も美しく最も荘重な部屋へ飛翔した。そして次の瞬間には、私の右手は部屋の扉の前で軽やかにステップを踏む。どうぞの声。扉をゆっくりと開き、古典的な名場面が描かれたいささか暗い夕べ¹²ストーリーの間を進む。

風が駆け抜けた。おそらく一秒と経っていないはずが、私には数分に感じられた。

「ん……ごきげんよう……？」

寝室の傍らに蠟燭^{ろうそく}を灯し、花柄の寝巻で上半身を起こす、長身の少女。彼女は不思議そうに私を上目使いで見遣り挨拶。彼女の声に、思わず、私の脚は後ずさる。恐怖ではない。むしろ彼女の顔は気品と美しさにあふれていた。問題があるとするなら、きつと私の方だ。

——沈黙。一分か、二分か、それとも一時間か。なぜ、どうして。これほど騒がしい沈黙は、今まであったろうか。私たちは黙ったまま、互いの瞳を見つめあうしかできなかった。

微笑み。彼女の頬が不意に輝いた。だけど、その表情はまだ硬い。

「……驚いたわ」

ようやく破られる沈黙。彼女の言葉は、私の疑惑も確信に変える。私が感想に同意を示すと、彼女の目から緊張の色が消えた。

「十二年前になるかしら。今まで忘れたことなどないわ、貴女のこと」

「そう、ですね。十二年。夢の中で、貴女と」

私は繰り返す。そう、そこにいる令嬢の顔は、あの幼い日に見た夢そのままだった。

自然と、笑みがこぼれた。笑ったのは私からか、彼女からか、それはわからない。私は、ベッド脇の椅子に腰かける。彼女と同じになる目線。これまで、ずっと同じ場所で暮らしてきたような錯覚。それはそうだ。だって、ずっと私はあの夢を憶えていたのだから。何か言わなくては。そう思うと、どうしても形式ばった歓迎の辞を述べてしまう。彼女は手を口にして可笑しそうにすると、「落ちて着いて、普段通りに喋っていいわ」と言った。

感覚が告げる初対面ではないという事実は、まさに私に物理的に作用した。すっかり饒舌^{じょうぜつ}になった私は、彼女の右手を握っていた。彼女は私の手を

握り、その上に自らの左手を重ねるようにして、私を覗き込む。途端に、私の首と頬はこの大胆な行為に茹で上がったロボスターになる。

「あ、そ、その……まだ自己紹介してなかったわね」

「……そういえば、そうね」

何とか話題を変えようと私は軽い抵抗を試みる。けれども、手の力は強くなる。これは彼女の手の力なのか、それとも。

「カーミラ。わたくしの名前は、カーミラ」

吐息が感じられる。カーミラ。彼女の唇の動きから、私は目を離せない。

「ふふつ、貴女は？」

「え、あ……私は、ローラ。ローラ・モートン」

「そう」とカーミラはかつての夢と同じくらい近くで囁いた。

「強盗、に？」

「ええ。まだ小さいころに。召使いが二人殺されたわ」

「ご、ごめん。辛いこと聞いてちゃって……」

「いいのよ、ローラ。昔のことよ」

カーミラの左手が私の頬に触れる。少しひんやりとして温かい手だった。

「……だから、付添いは必要ないわ。鍵をかけた誰もいない部屋でしか、寝ることができないの」

カーミラは、そう言ってメイドの付添いを断った。視線を外すのが名残惜しく、まだそのまま部屋にいたかったが、時間が時間なので別れの挨拶を交わした。

翌朝、と言ってももう昼過ぎになっていたが、日の光の下で見る彼女はまた格別だった。私は、この絵画からそのまま出てきたほど美しい女性を、

今まで目にしたことはなかったのだから。子供のころの夢の恐怖、そして昨夜の衝撃的な出会いは、カーミラ自身の前では全くの些事さきとなっていた。

カーミラの黒い瞳。そして髪はとても柔らかかできめ細やかな、いくらか金の入ったダークブラウンだった。¹³天鷲絨てんじゅうじゅうに結ばれた髪がその時点で在天の諸聖人の残した聖遺物に値するとしても、私の指の間を流れる心地よい感触それ自体の前では一反の布帛ふはくでしかなかった。立ち上がった彼女はスラリと背が高く、そう、ちょうど私を抱くのに丁度よい高さだった。私は、この黒翼の天使と初めて逢った夜から、お互いに秘密を共有する関係になれたことに舞い上がっていた。食堂で黙ってチョコレートを飲む（彼女はこれ以外口をつけなかった）様子を、使用人たちは美しいが冷たい印象を受けると評したが、私からするとあまりにも表面的だと感じられた。透き通る唇から発せられる酒腕しゅくわんさは、確実に私を捉えて離さなかったというのに。あの事故から一週間とはいえ、もう私たちは十二年の友人と言って差し支えなかった。

それでも、彼女の輝きが私の中に入ってこない話題はあった。彼女の一族の名も、どこに住んでいたかというのも、私がそれを尋ねるたびにカーミラは大変物悲しいという表情を浮かべた。いかなる戦略を用いようと、彼女の態度は変わらず、彼女の表情もまた、私にそれ以上の追及を諦めさせた。彼女はその優雅な腕を私の首に回して、私の頬に彼女の頬を寄せながら、最後にはすべてわかるからと呟くのだった。頬が熱くなるのと同時に訪れる諦めを彼女は感じ取ったのか、私の髪を撫でながら耳元で言葉を紡ぐ。

「可愛い人。でもどうか、傷つかないでほしいわ。わたくしを心無い女と

思わないで。わたくしは自分の弱さの抗いがたい法則に従ってるまでなのよ」

彼女の手が震え、私を抱き締める力は強くなる。そして私の髪にゆっくりと指をからめ、彼女は瑞々しい唇を私の頬へ落とした。

「ごめんさい。最期にはきつとわかるから。どうか貴女の心に傷をつかせないで。貴女の心が乱れるとき、わたくしの心もまた血を流すわ」

濡れた頬に彼女の吐息が纏わりつく。そこから身体全体に痺れが走り、なす術なく私はすべてを彼女に委ねる。

「そのままでは、わたくしはそうして貴女の中に命を受けて、そして貴女を殺してしまうの。貴女はわたくしの中に滅びていくわ。でも、それは仕方のないことなのよ、ローラ。今度は、他の誰かに貴女が近づいて、この酷い歓喜を味わうのかわ」

「嫌、私、他の誰かなんて」

「ふふっ、可愛いわ、ローラ。でも、これも愛なのよ。だから、しばらくはわたくしや、わたくしの身の回りのこと、知ろうとしないで。わたくしを信じていて」

風で葉が擦れる音で私は我に返る。何の抵抗もなく彼女の拘束から離れると、言い訳にもならない言葉を並べて部屋を飛び出した。

普段の彼女はとても気さくで、時折見せる物憂げな表情や私のすべてを打ち縛る瞳は出てきてなどいなかった。それでも稀に覗くカーミラの目、言葉を紡ぐ唇が、私をかき乱した。それらを私は彼女の演技や悪ふざけだと片づけることはできなかったし、そうしたくもなかったのかもしれない。

「ローラ、待って、お願い」

カーミラの情けない声に私は振り返った。その日は城を出て私たちは散歩に出かけていたのだった。確かに昼食の入ったバスケットを持った私の足取りはいつも以上に軽やかだったかもしれない。それでも、カーミラがこんなに早く根を上げるとは思っていなかった。

「カーミラ、大丈夫？」

「ちよつと、休みましょう」

彼女の顔には明らかに疲労の色が見て取れた。今まで、体力がないことは何度も見てきたから、私は木陰に備えてあったベンチへカーミラを誘導した。

「こうしていると、いつもと立場が変わったみたいでうれしいわ」

「もう、ローラ。わたくしが辛いとわかって楽しんでるわね」

「あは、どうぞ、お嬢様」



恭しく彼女を支えてベンチに座らせる。私はすぐにその隣に腰を下ろし、ただ風の音に耳を澄ませた。私は、あの否応なしに突き落とされる朦朧とした快樂よりも、今このときのような繋がりの方が好きだった。

最近、ようやくカーミラから、時折彼女自身のことについて聞かされるようになった。いたるところに散りばめられた、私の知らない風俗習慣の人たち。普段聞きなれない抑揚を持つ単語。それらは彼女の故郷が私の考えるよりもっと遠くの地であることを示しているのだろうか。

ある日の午後。このときも私はカーミラを連れて森へやってきていた。今日はきちんと彼女の体力も考えて、速度を加減していたためか、いつもより遠出することができた。二人で草地に寝転がると、自然私たちは手を繋いで風を感じていた。カーミラは涼やかに目を閉じている。

突然、彼女の目が開き、今まで見たことがないほど顔がゆがんだ。同時に、私の耳に甲歌が聞こえてくる。私は彼女の様子に驚きつつ、身を起こした。ちょうど、葬列が道をこちらに向かってきていた。黒衣に担がれた棺の後ろを、項垂れた様子の知った顔が続いている。

「巡邏さんだわ……家族が亡くなったのかしら」

その後ろを農夫たちが弔いの歌を歌いながら歩く。私は立ち上がり、唱和に加わった。それも、いささか強い腕への揺さぶりで中断する。「どうしたの」と振り返ると、カーミラの顔は白く、いつもの疲労ではなく、とても気分が悪そうに見えた。

「耳が……壊れそう……」

苦しそうな彼女を、少し無理して抱きしめる。

「ごめん……お願い、もう少し、このまま」

耳をふさいで私の胸で震えるカーミラ。

「お願い、もっと強くして。強く、強く」

私は黙って、彼女の頭を抱き締め続けるしかなかった。

城館に帰ると、父や使用人たちがとても忙しそうにしていた。来客の準備という様子ではない。彼らの顔は悉く強張っていた。自然とカーミラと繋いだ手に力が入る。

「どうしたの？ みんな」

私たちに気づいて迎えに来てくれたマダム・ペロドンに開口一番そう告げる。マダム曰く、流行り病が発生した、と。

「これで、二件目だ。……それと、もうすぐ四件目になる」

居間に戻ってきた父は、マダムの言葉を補足する。

「喉が締め付けられるような痛みから、どんどん生気がなくなっていくって、

三日ほどで衰弱死、だそうだ」

父は、座って溜息をつく。

「村の者は、いにしえより隣人を食い物にしてきた恐ろしい魔物の仕業だとしきりに叫んでいる。まるで、迷信が感染していくようだ」

「もうやめましょ、父様」

カーミラの顔色が悪かったので、私は話を切り上げて、もう寝てしまおうとした。私は、彼女を連れて居間を出た。彼女が歩けるギリギリの速度で、城の回廊を歩く。

「死ぬのが、怖いのか？」

不意に、カーミラが呟いたので、私は足を止めた。

「誰でも、怖いわ」

「そう……でも、愛する人と一緒に死ぬことは、共に生きることにならぬいかしら」

月明かりに濡れた髪の中に覗く瞳に、私は「おやすみ」の一言を送るのがやっとだった。

流行り病は一向に沈静化の様子を見せず、ある程度の周期で犠牲者が生まれていた。父は堪り兼ねて、グラーツにまで奇病を治す医師を探すよう使いを走らせていた。

使いを見送った夜、入れ違いにグラーツから馬車の一行が到着した。私を含めて城の人はみんな、一人を除いて彼の到着を心待ちにしていたのだ。彼とは、首府で絵画修復師をしている人で、世間の話題に飢えた田舎の人たちにとって、最高の情報源でもあったのだ。父はこの十リーグもの道程を旅してきた客人を大いに労い、客人も部下と共に大きなケースを運び入れる。父はリストを取り出して読み上げると、客人の部下は対応するケースから絵画を掲げた。

そんな私たちの様子を、カーミラは興味なさげに眺めていた。しかしその時私は彼女の様子よりも、美しく修繕された絵画の受け渡しや父の蘊蓄を聞くことに熱中していた。

「これは、まだ見たことのない絵だな」

父はリストを見ながら唸る。

「一六九八年、マルシア……カルンシュタインと書かれていた、あの絵だ」

芸術家たちはここぞと得意満面に、呼ばれた絵画を取り出した。というのも、元々の絵は「フイートと半分程度の小さな絵で、額縁もなく城に打ち捨てられてすっかり真っ黒になっていたものだったからだ。」

「カーミラ!？」

叫ばずにはいられなかった。絵画修復師が架けたキャンパスには、なんとカーミラそのものが描かれていたからだ。瞳、髪の色、口元の黒子の位置まで一致していた。しかし、反応したのは私だけで、父も「なるほど、確かに似てる」と言っただけ、次の絵の話題に移っていた。

「父様、この絵を私の部屋に飾ってもいい?」

父は二つ返事で「いいとも」と請け合った。舞い上がったまま、私は使用人たちにお願ひし、絵画を部屋に運び込んでもらう。その間も、当のカーミラはというと、長い睫の中で何か物思いに耽ったまま、黙って私の後についてくるだけだった。

部屋に架けられた絵画を前にして、私とカーミラはベッドに座っていた。

「マルシアじゃなくて、マーカラね。マーカラ、グラーツ・フォン・カルンシュタイン」

「カルンシュタイン……その一族は、今どうしてるの?」

朝以来、カーミラが初めて口を開いた。その問いに、私は三マイル先のカルンシュタイン家の領地の話をする。

「内乱で、すっかり滅びたそうよ。血を引いている人はいるかもしれないけれど、少なくとも家名はなくなってるわ」

聞いてきた割に、カーミラはあまり興味がなさそうだった。そのまま窓に近づき、そこに手を当てる。

「それにしても……美しい月」

彼女は呟く。薄雲がかかり、幻想的な光が触れるものを濡らしている。そう、あの時の月明かりが。

「わたくしがここへ来た夜のことを思い出していたの？ それとも？」
あえて、私は答えない。

「ふふつ、ねえ、ローラ。わたくしが来てよかったかしら？」

「もちろんよ、カーミラ」

「そう……そして貴女は、わたくしだという絵を自室に飾るのね」

私は抱き寄せられる。そして、彼女は手を私の腰に回した。ああ、この瞳に見つめられると、私は何も考えられなくなる。

「なんてロマンチストなの、貴女は。バイロンもハイネも、貴女には敵わないわ」

そう、と彼女は小さく囁くが、その瞳は私を捉えて離さない。そのまま私たちはベッドに沈む。ふわり、と私の頭を庇う^{かば}気遣いに、胸の奥が締め付けられた。

「カーミラ、貴女、今日はどうしたの。あ、そうだ。ワインを貰いにいきましよう。それから、もう寝てしまおうの」

「それは、もう貰っているのよ、ローラ。ブランジアンに預けられし葡萄酒は、すでに私と貴女で飲み干してしまったの」

唇を覆う柔らかな感触。今までで一番近くに感じられるカーミラの顔。

私は目を開いて、何が起こったのか考えようとした。けれども、それは無駄な抵抗だった。頭の芯が痺れて、私の腕は思考に関係なく彼女の首を抱く。息継ぎで漏れる声、彼女の吐息がかかる。いつまでも、このままでいたいという思いすら、その時の私の中を駆け巡った。

「……ん。ローラ、可愛い人」

「カー……ミラ……。駄目よ。私は、貴女の愛しの殿方ではないの」
停止寸前の思考で、何とか口を開く。

「貴女はきつと恋をしたことがあるの。その恋が今も続いていて、私にその人を重ねてるだけなのよ」

「あら、わたくしは誰とも恋なんてすることはないわ」

もう一度、彼女の唇が私に触れる。

「貴女以外の誰とも、ね」

彼女の唇は、口から頬、首筋へと、ゆっくり下りてくる。首元のボタンはすべて外され、彼女の手は優しく私の首から胸を肌触させる。

チクリ、という感触。ぼやけた視界に彼女の頭が見える。私の首を這う舌の感触。部屋に響いているのはその水音と吐息だけだった。

『許して』

今のは、誰の声だろう。

『わたくしが愛しているのは貴女だけ。けれども、それは許されない』



どうして、泣いているんだろう。いや、あそこで泣いているのは一体……誰？

『だから、一緒に、私と、永遠に』

「ああ……っ……マーカラ……」

喉から出たこの声は誰のものだったのか。ベッドに縫い付けられた私にはわからなかった。ただ、わかったのはその直後、私に覆いかぶさっていた感覚はすべてなくなり、カーミラの姿がベッド脇に退いていたことだった。

「……マ……ツカ？」

カーミラの声が、かすかに聞こえる。

「……あのときからずっと、わたくしは闇の中を彷徨さまよってる。そう、あのときから、ずっと。ずっと」

私の記憶にあるのは、ここまでだった。彼女がどうしたのか、私がどうなったのか、何もわからない。日の光によって私が起こされるまで、私の感覚が再び目覚めることはなかったのだ。

私は、特に何事もなかったかのように振る舞うことにした。カーミラも、別段何かあったようなことは言わなかった。きつと、あの夜のこととは夢だったのだ。少なくとも私はそう思うことにした。

問題は、むしろ彼女ではなく私だった。あれから、夢で時折首が苦しくなって目が覚めることが多くなった。けれども、どうしてか私は、その不自由さを甘んじて、いや、喜んで受け入れていた。後から思うと不思議でならないが、その恍惚とした恐怖は、私を支配していた。

それが三週目に入って、いよいよ私の外見にもこれらが現れていた。父

は何度も私の体調を尋ねてきたが、私は持てる限りの強情で、どこも悪くないと主張した。ある意味、これは正しかった。私は村の奇病にはかかっていない。そうだというなら、もう三週間もこの気怠げだるさが続くことに説明がつかない。

その頃は丁度父も忙しかったのか、これ以上は何も言われなかった。ただ、一週間後に来るはずだったお医者様が早めに来たくらいだ。父はお医者様と何か話していたが、そのことを私に伝えてくれることはなかった。

昼過ぎ。カーミラが起きてきた。私もその頃には昼前まで寝ており、彼女より少し早く起きる程度だ。その日は父も時間が取れたのか、みんなでコーヒーやチョコレートを取った。カーミラもいつも通り、チョコレートを少し口に含む。いつも通り。そのはずだった。少なくとも私はそう思っていた。

そんなとき、カーミラがおずおずと父の前に行き、そろそろ此処を発ちたいと言い出した。私の手にあったカッブは、音を立てて床に転がった。「皆様には限度を超えてご厄介になっています。できれば、馬車を用意していただければ、明日にでもここを発ちたいと思います。最終的には、わたくしは母と逢うことができますので」

父は大きな声で「そんな馬鹿なことは考えなくていい」と言った。カッブを拾いながら、私はホッとした。そこで、彼女と視線が合うが、彼女はすぐに目を伏せた。一瞬見えた彼女の悲しげな表情に、私の手も止まる。

「君の母君が帰ってくるまで、我が家は君を放り出したりなどしない。君がこのことについて気に病む必要は、全くないんだ」

父はカーミラの両肩に手を置いて、優しく諭さとす。彼女は一度頷いて、もう言わないと父に誓った。

片づけ終わったころ、父は私に遠出を持ちかけた。もちろん、私の体調に勘付いているので、馬車を使っただが。

「マダム・ペロドンとカーミラもどうだ？」

父は無理して明るい声を出している。ああ、きつと、私を元気づけたいのだろう。私はこの頼れる背中に頭を預ける。

馬車はしばらくしてやってきた。目的地は、昔よく行ったカルンシュタインだった。

廃村まで馬車ではさほどかからない。久しぶりの外出、しかも友人との外出に、私の心は高鳴った。しかし、肝心のカーミラは、どこか上の空という感じであった。

カルンシュタインでの散策は、確かに私の心を幾分か慰めてくれた。父とマダム、そしてカーミラの献身は、私にとって掛け替えのないものだと認識を新たにした。きつと、神経が過敏になっていたのだろう。今更ながら、自分の強情を笑いたくなってくる。

と、私たちが来た道と反対側の道から、一両の馬車がやってくるのが見えた。旅行鞆を後ろに乗せたワゴンである。馬車は私たちの馬車の隣に付けると、中から二人の人物が下りて丘を登ってきた。

「あれは……シュピールストルフ將軍だ」

父は一瞬躊躇^{ためら}ったが、手を挙げて將軍に挨拶する。私も一瞬誰かわからなかった。というのも、元来痩せていた彼がさらに痩せて、顔立ちに現れていた冷静沈着さが、何か陰気な落ち着きのなさに変わっていたのだ。

將軍は、その鋭い眼光で私たちを見遣ると、形式通りの挨拶をした。その隣には、とんがり帽子と黒装束の、灰色の髪の老人がつき従っていた。

將軍がと老紳士が近づいてくる。私もマダムも、そしてカーミラも、彼らの視界に入っただろう。

その時だった。將軍の顔はみるみる強張り、続いて見たこともないほどの形相を浮かべ、私たちに向かって走りこんできた。

「ミラーカ！ 貴様！」

そう叫んだが早いかな、將軍は抜刀する。父もマダムも私も何が起こったのかわからず茫然とするしかなかった。そのまま將軍は剣を振りかぶり、振り下ろす。

「な……に……？」

將軍の標的は、カーミラだった。將軍の一閃は、しかしカーミラの身体を傷つけることはなかった。彼女は身をかわすと、そのまま將軍の腕を取り上げる。將軍は苦悶の表情を浮かべ、剣を取り落とす。そこには、私の知っているカーミラはいなかった。その表情はもはや人間のそれではない。彼女は、その細腕からは考えられない怪力で崩れ落ちた將軍の首を持つと、そのままに持ち上げた。

「カーミラやめて！」

思わず、叫んだ。彼女は目を見開いて私の方を向いた。將軍が地面に落ちる。数秒、沈黙が流れたあと、カーミラは森へと駆けだした。

誰も、追えなかった。

老紳士はフォルデンブルク男爵と言い、グラーツで吸血鬼伝説に関する研究をしている方だった。彼によると、上下シュタイアマルクからモラヴィア、トルコ領セルビア、北はポーランドからロシアに広まる吸血鬼は、自殺者の成れの果てであるという。人は自殺すると、ある確率で吸血鬼化

してしまうのだそうだ。美しいカルンシュタイン女伯爵マーカラも、その亡霊となってしまったのだった。

あの信じられない出来事の翌日、將軍と男爵に説明を受けた父は、私とマダム・ペロドン、他將軍の部下の衛兵もつけて、私を城で待機させた。そして自身は將軍、男爵、そして牧師様を連れてカルンシュタインの礼拝堂へ向かった。

ここから先は、完全に伝聞で、確かな情報だとは言えない。ただ、礼拝堂の青い花の下から掘り起こされた遺体は、まるで生きているかのような鮮度を保っていたこと、棺が血でいっぱいだったことから、吸血鬼化していることは確かだったそうだ。帝国の公的な儀式に則り、彼女の遺体は処理され、灰は川に流された、と記録には残っている。

フォルデンブルク男爵は、マーカラの自殺の原因は知らないと言っていた。ただ、私にはなんとなく、彼女——カーミラとのあの夜の出来事が、何度も頭を巡っていた。コーヒーに口をつける男爵を横に、私は窓の外を見た。そこには、あの日と同じ月が、薄雲の上からあたりを濡らしている。

私は、思案するのをやめた。私は、ローラであって、彼女は、カーミラであった。今の私に言えるのは、これだけなのだ。

あれ以来、私はほんやりしながら、はっと我に返ることがある。特にこんな月の夜は、彼女の優しい足音が、今にでもそこに現れるような気がしてならないのだ。

(吸血姫カーミラ 了)

- *1 現在イタリアのトリエステ
- *2 一マイル〓約一・六キロメートル
- *3 女性家庭教師の役割を担う使用人
- *4 一リーグ〓三マイル
- *5 家政婦とも。家政使用人の長
- *6 育児のための女性使用人
- *7 セイヨウシナノキ
- *8 馭者。馬車を操る使用人
- *9 厩舎番。馬の管理をする使用人
- *10 執事
- *11 従僕。馬車の護衛や手紙や荷物の受け取りなどを行う使用人
- *12 壁に架けられる室内装飾用の織物
- *13 ビロードのこと
- *14 布きれのこと
- *15 パトロールする人のこと。ここでは森林の調査や維持の担当者
- *16 一フィート〓約三〇センチメートル
- *17 Gratinと綴る。女伯爵または伯爵夫人
- *18 両名とも詩人の名前
- *19 『トリスタンとイズールト』に出てくる惚れ薬。媚薬